

支部見聞録 (東海支部)

From 岐阜



▲関鍛冶伝承館に展示されている兼元(孫六)の刀。三本杉といわれる刃文が特徴的★
▶関では刀鍛冶の技術が受け継がれ、実際に作刀が行われている★



刃物のまちに今も息づく刀鍛冶の技と美

岐阜市に隣接する関市は、全盛期には300人もの刀匠がいたと伝えられる、日本刀の一大生産地だった。その技術は刃物産業に受け継がれ、関は日本一の刃物のまちとして知られている。今、ブームを呼んでいる日本刀。その技と美を現在も受け継ぐ地へ。関の刀鍛冶の歴史と伝統を訪ねよう。

刀祖「元重」に始まるといわれる「美濃伝」

関へと至る電車の便は、単線の長良川鉄道のみ。「刃物会館前」駅を下りると、いかにも地方のまちならしい、畑地と住宅が混在する静かな風景が広がる。その中に刀鍛冶の伝統を今に伝える関鍛冶伝承館や、はるか昔に刀匠たちが奈良・春日大社の分霊を勧請して建立した春日神社などがある。一方で、関を発祥とするカミソリのメーカー、フェザー安全剃刀のミュージアムがモダンな姿を見せていて、伝統的技術から近代的産業へと続く関の歩みを目の当たりにするようだ。

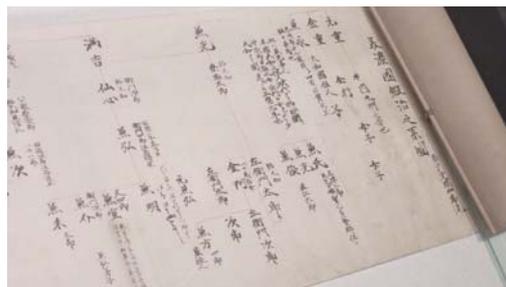
平安時代後期から安土桃山時代までの古い時代に作られた、古刀と呼ばれる日本刀。特に名高い五つの産地の刀にはそれぞれ特長があり、その技術を受け継ぐ各系統を「五箇伝」と称している。大和伝(奈良)、山城伝(京都)、備前伝(岡山)、相州伝(神奈川)、美濃伝(岐阜)の中で、最も新しいものが関を中心とする美濃伝だが、それでも歴史は鎌倉中期に遡るといわれる。

「関鍛冶の刀祖は、九州、あるいは伯耆(鳥取)から来た『元重』という名の刀匠だといわれていますが、実在の人物かどうかははっきりしていません」と語るのは、関市役所経済部観光交流課の岩佐哲斗さん。『美濃国鍛冶之系図』(通称『宝徳系図』)という、

後の室町時代に作成された史料には、元重に続いて金重という刀工の名が書かれている。こちらは銘を刻んだ刀も現存し、相州鍛冶の流れをくむ実在の刀匠だったとされている。刀剣の歴史を知るには、美濃に限らず、今に伝えられた刀剣自体とわずかな史料しかなく、詳しいことまではあまり分かってはいない。しかし、鎌倉時代末期の相次ぐ抗争で刀の需要が高まり、その後も関に大和など各地から刀匠の移住が相次いだことは確かだ。「関には水や松炭など刀鍛冶に必要なものが豊富にあり、水運、陸路ともに交通の要衝にありましたから」と岩佐さん。加えて、刀の焼き入れの際に刀身に塗りつける焼刃土に適した粘土にも恵まれ、この地には刀剣製造に必要な条件がそろっていた。

組織的に運営され、発展した関の刀鍛冶

室町時代になると、鍛冶仲間の自治組織である「鍛冶座」が結成された。この鍛冶座の中心となった七つの流派を「関



▲関鍛冶の系譜を記した『宝徳系図』(室町時代の写本)◎
▶江戸時代の関の刃物商の看板◎



※フェザーミュージアムはリニューアル工事中。2016年3月上旬オープン予定



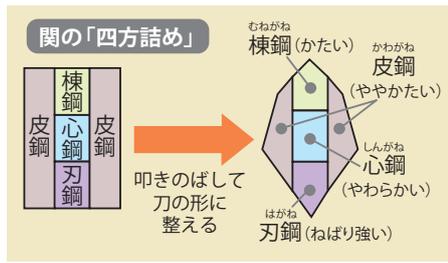
▲大和の春日大社の分霊を勧請、関鍛冶の守護神とした春日神社

◀刀鍛冶の鍛冶場にはつきものだった、鍛冶神の図。刀匠の仕事ぶりもうかがえる◎



◀大きくうねる刃文が印象的な桃山時代の刀(氏貞作)◎

▼古式にのっとった鋼の鍛錬。小鋸と大鋸を交互に振り下ろす★



七流」といい、関鍛冶が総氏神とする春日神社に鍛冶座の本拠が置かれた。このように、刀鍛冶が統括的に産業として運営された例はほかに類を見ないという。最盛期は足利氏の支配が揺らいで戦乱が広がった室町時代の中～末期。関鍛冶の数は300人を数えて需要に応える量産体制が整えられ、「之定(のさだ)」と呼ばれる二代目兼定や「関の孫六」として有名な二代目兼元などの名匠を生み出した。安土桃山時代となって戦国大名が各地を支配するようになると、関の刀匠たちは召し抱えられ、全国で活躍するようになる。以後、江戸時代を通じて美濃伝と何らかの関わりを持つ者が刀匠の主流を占め、日本刀のスタンダードを形作っていった。

全国に名を轟かせた関の刀の特長は、「折れず、曲がらず、よく切れる」実質本位の作刀にある。それを支えていたのが、関独特の「四方詰め」という製法だ(図を参照)。日本刀は硬さの異なる鋼を組み合わせることで鋭い切れ味と強靱さを作り出すが、四方詰めでは柔らかい心鋼の四方を硬い棟鋼や、やや硬めの皮鋼、粘り強さを持つ刃鋼で固めることで、より強い構造を実現しているのだ。

関鍛冶伝承館の展示や古式日本刀鍛錬の実演、資料映像の放映を見れば、その伝統の知恵と匠の技に目を見張られる。原料となる玉鋼を小さく割り、硬度別に分けてそれぞれを高温に熱し、鋸で打つ。飛び散る火花は叩きだされた不純物で、打っては鋼を折り曲げ、また打って折り曲げることを繰り返して鍛錬し、鋼の純度を調整する。こうしてできあがった質の異なる鋼を四方詰めにし、刀身の形に叩き整えていく。焼き入れに際しては、できあがる鋼の性質をコントロールするために、刃になる部分には薄く、それ以外の部分には厚く焼刃土を塗りつける。真っ赤に熱した刀身を水に入れて一気に冷却

することで鋼は変質し、刀に命が吹き込まれるが、同時に膨張率の違いで刀身は反り、焼刃土の境目が美しい刃文となって残るのだという。

産業としての刃物と伝統の刀剣が並び立つ地

徳川幕府による太平の時代が到来すると、日本刀の需要は激減。関の刀匠たちは小刀や包丁、剃刀などの家庭用打刃物や鎌や鋏などの野鍛冶に活路を見いだしていく。明治以降も関では、ほかに先駆けてポケットナイフやカミソリの替え刃の製造に乗り出し、積極的に新しい設備や機械を導入。ステンレスを主力とする工場生産へと大きく舵を切っていった。こうした時代に応じた展開が可能だったのも、刀鍛冶から発したすぐれた技術と古くから地域を挙げて生産に取り組んできた伝統があってこそ。今では包丁やポケットナイフ、理容はさみ、カミソリの生産で、関は全国をリードする存在だ。「海外にも盛んに輸出されています」と岩佐さん。

その一方で、関では刀鍛冶の伝統と技術の火も消えることはなかった。1907(明治40)年、関七流の末裔である真勢子兼吉が関鍛冶の技術衰退に危機感を持ち、私財を投じて「日本刀鍛錬所」を興して弟子を育てたのをはじめとして、技術保存会なども作られた。軍刀の生産を担った時代もあったが、現在では文化庁の認可を受けて美術刀剣や居合刀の製作を中心に製造が行われている。

鎌倉以来の刀と刃物の伝統を受け継ぐ地、関。岩佐さんによれば、市では関鍛冶伝承館周辺を「刃物ミュージアム回廊」と名づけ、整備を進めて「刃物のまち」をPRしていく計画だという。一見何の変哲もない静かな地方のまちの風景の中に、700年にわたる技術と産業が今も確かに息づいている。



▲駅近くの刃物会館では2,000点を超える関の刃物を販売★



▲関市刃物まつり恒例、関アウトドアナイフショー★



▲関ではカスタムナイフ製作も盛んだ(原幸治作)◎



◀▲刃物販売やイベントにわく刃物まつりは10月初旬開催★

別冊 FROMはウェブサイトへ

eふぁみり もあわせてご覧ください! <http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>



関市のもうひとつの顔。円空仏の神髄をご紹介します。